

やがて高齢化社会にな

るとずっといわれてき

て、今、すでに高齢化社

会になっている。教会も

例外ではなく、主日のミ

サの参加者をみても、高

齢者が目立つ。青年たち

の姿はめっきり減り、壮

年は仕事に追われ、教会

に来る「ひま」がない。

いろいろな役割は、教会

に求められる人たちに集

し、一人の人がいくつも

の役割を兼務することに

なる▼高齢化の波は、司

祭、修道者にも押し寄せ

てきている。司祭、修道

者の養成は、一朝一夕に

してなるものではなく、

長い時間と多大な費用が

要求される。司祭職を目

指して養成を受けている

神学生は少なくとも統計

上は減少しており、この

ままいけば、司祭、修道

者の数が現在に比べて減

っていくことは火を見る

より明らかである▼司

祭、修道者の減少を懸念

する人たちが多く中で、

あまり不安を抱いていな

い人々もいる。元来、教

会「神から呼び集めら

れた」人々の集まりであ

り、多くの信徒から成っ

ている。歴史の流れの中

で、司祭、修道者が増大

し、教会が聖職者中心に

動いた時代が顕著であっ

たが、そのような状態は

「教会」の本質的な姿か

ら見ればむしろ例外的な

ことである。考え方によ

っては、現在、そしてこ

れからの教会の姿がある

意味で理想的なのではな

いか、というのがその人

々の考えである▼この考

えは、決して司祭、修道

者不要論ではなく、その

本来のあり方を問いかけ

るものではないだろうか。

どの宗教を信じたらよ

いのか、仕事をしながら

ら、さまざまな宗教を見

てきた一人の青年がいう

る。そのうち彼は「信じ

るとすればカトリックし

かない」と思うようにな

った。ある時、心を決め

た彼は電話帳を開き、自

分が住んでいる近郊の教

会に電話をかけた。ひと

つ、ふたつ、みつつ。

返事は「忙しくて……」

「神父様が不在で……」

「うちでは要理クラスが

ないので……」▼カトリッ

ク教会がこんなはずはな

い、と思いつながら彼は電

話をかけ続けた。「五分

だけでもいいのですが、

お話を聞かせていただけ

ませんか……。二日間に

わたって電話帳にあるす

べての教会に電話をかけ

たが、結局彼の望みにこ

たえてくれた教会はなか

った。彼は理解できなか

った▼話を聞かせてほし

いという人を、どうして

教会は拒むのだろう。自

分の方から進んで近づい

てくる人をどうして受け

入れないのだろうか。そ

れでいて、教会にあまり

来ない人に呼びかけた

り、去って行く人を引き

留めようとしてもしてい

ない。変な宗教だ▼オウム

真理教に関する一連の出

来事をカトリック教会は

どのように受け止めてい

るのだろうか。対岸の火

事としか考えていないよ

うだ。そこには「こちら

の教会には本物の真理が

ある」というおごりさえ

見えてくる。悩める人、

生きる意味を問いかける

多くの青年たち。今、人

々は教会に押し寄せて来

ている。今一度、そして

「新信者」と「旧信

者」という言葉をよく聞

く。この言葉はどのような

に区別されて使われている

のだろうか。どこまで

が「新信者」で、いつか

ら「旧信者」になるのだ

ろうか▼全国的に、この

ような区別があるのだろ

うか。あるいは、ある地

方に独特なものだろう

か。ある子どもが親に言

ったという。「お父ちゃ

んは新信者だけど、ぼく

は赤ちゃんのときに洗礼

を受けたから旧信者だよ

ね」。洗礼を受けたばかり

の時に「新信者」と呼

ぶのは何となく分る気が

するのだが、いつまで

も「新信者」、「旧信者」と

いう区別をするのはどう

かと思う▼新・旧信者の

区別には独特のひびきが

ある。ときには「差別的

」な響きさえ感じるこ

とがある。全く変な話な

のだが、教会共同体の中

で「新信者のくせに……」

と聞く。「新信者は……」

この言葉、表現の裏には

確かに差別のにおいがす

る。教会活動を熱心にし

ていると「新信者のくせ

に、洗礼を受けたばかり

で何も分らないのに

……。祈りは全然しない

で、活動ばかりしている

」私は先祖代々の信

者。伝統がある。新信者

はまだ駆け出し。教会の

ことが分かるはずがな

い」など。新・旧信者の

使い分けには、どうやら

先輩・後輩という考え方

があるようだ。かくし

て、洗礼の時には喜んで

迎えられたのに、そこか

ら「新信者」としての苦

難が始まる▼イエスは新

クリスマス翌日に街

の様子は一変する。クリ

スマスセールは歳末大売

り出しに代わり、「初も

うでは……へ」という看板

が目につく。教会を訪れ

たのと同じ人々が一週間

後には神社に参拝する。

今や日本の年末の風物詩

である▼ひっそりとベツ

レムで生まれ、飼ひ葉

おけに寝かされたイエ

ス。神の子の誕生。その

神の子を最初に訪れたの

は羊飼いたちであった。

星の導きで神の子に会っ

た彼らは、その光景を見

て天使からのメッセージ

を人々に知らせた▼この

くだりはイエスの復活の

出来事と重なる。墓を訪

れたのは婦人たちであっ

た。イエスはいなかった

が、輝く衣を着た二人の

人が現れ、メッセージを

伝える。婦人たちは墓か

ら帰って、十一人とはか

の人皆に一部始終を知ら

せた。人々は喧嘩（けん

そう）の中でイエスの誕

生を祝う。しかし、クリ

ストの誕生はその復活の

出来事と同じように人知

れず、静かに、ひっそり

と行われる。そして貧し

い人のみが、その救いの

歴史の大イベントに立ち

会うことができるのであ

る▼新しい年が与えられ

た。今年もまた、一人ひ

とりの中にキリストが誕

生するだろう。弱く、貧

しい人の心の中に。孤独

とさびしさに打ちひしが

れている人の中に。戦禍

の中の人々に。離別の悲

しみに泣く人の中に。不

正に悩む人の中に。薬物

などの依存からの解放を

求める人の中に……。毎

三十年以上の間、ゆ

るしの秘跡を受けず、聖

体拝領もできないまま悩

み続けている女性がいる

▼事情があつて、教会で

結婚式を挙げることでで

きなかつた。相手は未洗

者だったが教会から許可

がおりず、悩んだ末、教

会外で挙式をした。司祭

から強くしかられ、気に

なりながらも教会を離れた。

夫に先立たれ、子ども

もたちも独立し今は一人

になった。教会へ戻るう

と思つたが、ミサに参加

しても聖体拝領ができな

い。そのたびにさびしい

思いをした。喜びのない

自分の信仰生活。ミサに

参加するたびにいや応な

く感じる自分の罪深さ。

いっそ信者をやめて夫と

同じ墓に入るかとも思

つた▼その折、小教区で

開かれた四旬節の黙想会

に参加した。教会外で結

婚しても必要な手続きを

して、ゆるしの秘跡を受

ければ聖体拝領をするこ

とができると知って耳を

疑った。そんなに簡単に

教会に戻るのか。いつ

教会の教えは変わったの

か。そんなに簡単にあの

「大きな罪」が赦（ゆる

る）されてよいのか。司

祭に何度も聞いてみた。

間違ひなく教会に戻る

▼キリストの教えは罪か

らの解放であり、そこか

ら来る真の平和であり、

復活の喜びである。教会

の使命はキリストがもた

らした喜びの福音を告げ

知らせることであつて、

さらなる重荷を担わせる

ことであつてはならない

▼彼女は今日の復活祭に

「……罪の赦し、体の復